

解釈主義と消去主義

— 命題的態度の実践的実在性 —

金 杉 武 司

一、はじめに—心脳同一説、解釈主義、消去主義—

地球は丸いと信じている、とはどのようなことだろうか。水を飲みたいと欲している、とはどのようなことだろうか。現代の心の哲学においては、このような信念や欲求は「命題的態度 (propositional attitude)」と呼ばれる。命題的態度とは、一般に、その内容を示す命題とそれに対する態度という構造を持つ心的状態のことである。たとえば、地球は丸いという信念は、「地球は丸い」という命題に対して「信じる」という態度をとる心的状態であり、また、水を飲みたいという欲求は、「水を飲む」という命題に対して「欲する」という態度をとる心的状態であると理解される。

それでは、このような命題的態度を持っているということはどのようなことだろうか。現代の心の哲学においては、いくつかの広義の「心脳同一説 (mind-body identity theory)」が有力な立場として認められている。たとえば、「機能主義 (functionalism)」によれば、各タイプの命題的態度はあるタイプの機能によって定義され、そのタイプの機能を実現する脳状態トークンであれば、いかなるタイプの脳状態であってもその命題的態度と同一であ

る。それゆえ、機能主義の下では、命題的態度と脳状態はタイプ的に同一ではないが、トークンの同一であると考えられる。これに対して、「非法則的一元論 (anomalous monism)」は、さらに刹那的なトークン同一性を唱える。非法則的一元論によれば、同一タイプの命題的態度トークンは、必ずしも同一タイプの機能を持つわけではない。したがって、同一タイプの命題的態度トークンは、ある場合には、タイプ α の機能を実現する脳状態トークンと同一であり、別の場合には、タイプ β の機能を実現する脳状態トークンと同一でありうる。このように、非法則的一元論によれば、命題的態度と脳状態との間のトークン同一性は、刹那的なトークン同一性に過ぎないのである。しかし、いずれにしても、個々の命題的態度を個々の脳状態に還元しようとする広義の心脳同一説によれば、ある命題的態度を持っているということは、ある特定の脳状態にあるということに他ならないことになる。

それに対して、命題的態度に関する「解釈主義 (interpretationism)」によれば、主体がある命題的態度を持っているということは、解釈においてその命題的態度が帰属させられるような一連の行為を為しているということに他ならない。「解釈」とは、われわれが合理的とみなす主体であるならば持つはずの命題的態度を主体に帰属させることによって、その主体の行為を説明、予測する営みである。たとえば、A氏が部屋のスイッチを押したとしよう。われわれは、A氏が合理的な主体であると前提し、部屋を明るくしたいという欲求と、部屋のスイッチを押すと部屋が明るくなるという信念を行為の理由としてA氏に帰属させることで、A氏の行為を説明する。このように、解釈が成立するためには、われわれの合理性の基準を解釈対象の主体が満たしていると前提しなければならない。それゆえ、解釈主義によれば、他の命題的態度や行為とともに合理化関係を形成することが命題的態度の構成原理であるということになる。したがって、解釈主義の下では、ある欲求や信念を持っていることは、すなわち、解釈においてそれらの欲求や信念で合理化されるような一連の行為を為すということに他ならないことになる。個々の命題的態度は、いわば、環境の中で生じた一連の行為にかぶせられる合理的ネットワークの網目として理解される

のである⁽¹⁾。このように、解釈主義は、個々の命題的態度を個々の脳状態に還元しようとする広義の心脳同一説と一線を描する。

このように命題的態度を脳状態に還元しようとする立場と一線を描するという点で、解釈主義は、コネクショニズムが有力視されている認知科学の現状とも折り合いがよい。ここで詳しく論じることができないが、コネクショニズムによれば、個々の命題的態度が個々の脳状態と同一であると考えることはできない⁽²⁾。つまり、コネクショニズムによれば、広義の心脳同一説は妥当な立場であるとは認められないのである。したがって、解釈主義は、この認知科学の現状と折り合いがよいという点で、命題的態度に関する最も有力な心の哲学であると言えるだろう。しかし、解釈主義は、以上のように個々の命題的態度を個々の脳状態に還元することを否定するがゆえに、脳状態との同一性を足場として命題的態度の実在性を主張することができない。これは、命題的態度の実在性を脅かすことにならないのだろうか。

実際、解釈主義者の一人として数えられるD・C・デネットは、この還元不可能性を理由に、命題的態度を単なる解釈上の概念的道具として理解する「道具主義 (instrumentalism)」を唱えている (Dennett [1981] pp. 52-53)。デネットが、「概念的道具」として念頭に置いているのは、赤道や三角形の重心である。赤道や三角形の重心は地理学や数学における概念的道具に過ぎず、実在するとは考えられないだろう。デネットの道具主義によれば、これと同様に命題的態度も実在するとは考えられないのである⁽³⁾。

同様に（必ずしも同様の理由とは限らないが）、命題的態度の実在性に否定的な立場としては「消去主義 (eliminativism)」を挙げることができる。命題的態度に関する消去主義によれば、われわれが解釈において主体に帰属させている命題的態度は実在するものではなく、かつてフロギストンやカロリックがそうだったように、本当は実在しないにもかかわらず、実在すると誤って考えられているものに過ぎない。つまり、実在性を否定されたフロギ

ストーンやカロリックが消去されたのと同様に、命題的態度もまた消去される運命にあるのである。

しかし、本当に、命題的態度は消去されるべきもののだろうか。解釈主義が正しいとすると、本当に、命題的態度は実在すると言えなくなってしまうのだろうか。本稿の目的は、解釈主義の観点から命題的態度の実在性を擁護することができるかどうか、また擁護可能であるとすれば、その実在性はどのように理解されるべきなのかを考察することにある。結論を先取りすれば、解釈主義は、実践的な観点から「存在」に意味を与えることによって、命題的態度の実在性を擁護することができる。

消去主義をめぐる議論には二つの流れがある。一つは、P・M・チャーチランドの「消去的唯物論 (eliminative materialism)」(Churchland [1984] [1989]) をめぐる議論である。また、もう一つの流れは、素朴心理学に関する「理論説 (theory-theory)」と「シミュレーション説 (simulation-theory)」の論争である。この論争は直接には消去主義を問題とする議論ではないが、しばしば、この論争の結論が消去主義の妥当性を左右すると考えられてきた。以下では、前者を二節で検討し、後者を三節で検討することにしてしよう。

二、消去的唯物論と実践的実在論

「消去主義」を「命題的態度の消去を唱える立場」として理解するならば、消去的唯物論は、消去主義の一つの形態に過ぎない。それは、消去的唯物論が還元主義的な前提を立てているのに対して、消去主義そのものは必ずしも還元主義を前提する必要がないからである。本節での考察はまさにこの点に関わる。「消去主義」と「消去的唯物論」は同義的に使用されることもあるが、本稿ではあくまでも以上のように、命題的態度の消去を唱える立場一般を「消去主義」と呼び、その中でも特に還元主義的な前提に基づく立場を「消去的唯物論」と呼ぶことで、両者を区別する。以下ではまず、チャーチランドがいかなる議論を展開しているのかを確認することにしてしよう。

二・一、チャーチランドの消去的唯物論

チャーチランドの消去的唯物論 (Churchland [1981] [1989]) において消去の対象とされるのは、まず第一義的には、素朴心理学で扱われる対象である。解釈では、信念や欲求といった命題的態度だけが扱われるのに対して、素朴心理学では、命題的態度の他に、一般に解釈の観点ではとらえることができないと考えられる感覚や知覚といった心的状態も扱われる(4)。したがって、消去的唯物論の議論で实在性が問題になっているのは、必ずしも命題的態度だけではない。しかし、チャーチランドが実質的に消去の対象として問題にしているのは、命題的態度およびその構成原理である合理性に他ならない (Churchland [1981] p. 1)。また、消去的唯物論に対する批判も議論の焦点を命題的態度に合わせていると考えられる。したがって、以下では、「素朴心理学」に言及すべきところを「解釈」に置き換えて考察を進める。

チャーチランドは、まず、解釈の概念枠組みを一つの経験的理論として理解する。以下では、経験的理論として理解された解釈の概念枠組みを「解釈理論」と呼ぶことにしよう。チャーチランドによれば、この解釈理論は非常に根本的な欠陥を抱えた経験的理論であり、それゆえ、最終的に神経科学へと還元されるといよりは、むしろ神経科学にとって代わられる運命にある (Churchland [1981] p. 1)。命題的態度は、誤った経験的理論における理論的措定物である以上、その实在性を認めることはできず、消去されなければならないのである。それでは、その根本的な欠陥とは何なのだろうか。チャーチランドは、三つの欠陥を挙げる (Churchland [1981] pp. 6-9)。以下ではそれらを順に見ることにしよう。

まず第一に、チャーチランドは、解釈理論が説明できるものではなく、説明できないもの、あるいは着目することすらできないものに注意を向けると、そこに非常に多くの心的現象が含まれることがわかると言う (Churchland [1981] pp. 6-7)。チャーチランドによれば、たとえば、精神疾患の本性或メカニズム、知性の個人差、睡眠の本性的

や機能、それに外野フライを走りながら捕ったり、走っている自動車に雪玉を当てたりする能力などは解釈理論によってほとんど説明されていない。

第二に、解釈理論は少なくとも二、三千年もの間停滞してきた。原始的文化におけるアニミズムを見ればわかるように、解釈理論の文字どおりの対象を高等動物の領域に限定するようになったのは、ようやくここ二、三百年のことに過ぎない。さらに、この望ましい領域においてさえ、解釈理論の内容とその成功度は、二、三千年の間ほとんど進歩しておらず、古代ギリシアの時代とほぼ同じである。チャーチランドによれば、解釈理論はいわば「退行的なリサーチ・プログラム」なのである。

第三に、解釈理論のカテゴリリーは、物理学のカテゴリリーと共約不可能であるように思われる。解釈理論が、隣接する問題領域を扱う他の物理学理論とうまく適合する唯一の理論であったり、より包括的な問題領域を扱う背景的な物理学理論に還元される見込みのある唯一の理論であったりするならば、解釈理論は信用に値するかもしれない。しかし、解釈理論は、志向性を持つ命題的態度を扱うがゆえに、より大きい背景的な物理学理論へ還元される見込みがほとんどないとチャーチランドは言う。チャーチランドによれば、解釈理論が置かれている状況は、かつて、錬金術やアリストテレスの宇宙論、生気論が置かれていた状況と同じなのである。

チャーチランドは、これら三つの欠陥を指摘し、解釈理論が消去される運命にある、あるいは少なくともその可能性を真剣に受けとめる必要があると結論づける。しかし、これらの欠陥は、本当に命題的態度を消去する根拠になるのだろうか。次では、以上の三つの指摘の妥当性を検討する。

二・二、還元主義の前提と実践的実在論

一見する限りで、チャーチランドが挙げた三つの指摘のすべてに対して反論が生じることが予想されるだ

ろう。本節では、それらの反論を見ていく。最も重要なのは第三の指摘に対する反論であるが、以下では第一の指摘に対する反論から順に見ていこう。

(一) 解釈理論の説明対象と進歩の歴史

まず、第一の指摘に対しては、解釈理論が説明を与えないものとしてチャーチランドが挙げた事例はみな、そもそも解釈理論が説明すべき対象ではないのではないかと、反論が考えられるだろう。(cf. Wilkes [1984] pp. 353-354)。精神疾患や睡眠といった現象は、そもそも、合理性の観点から理解されるべき現象であるとは考えられないからである。したがって、第一の指摘は、少なくとも解釈理論および命題的態度を消去すべき根拠にはならないと言いうことができる⁽⁵⁾。

また、第二の指摘に対する反論は、第一の指摘に対する反論と関係する。つまり、解釈理論が古代ギリシアの時代以来これまで進歩してこなかったのは、そもそも、解釈理論がもはや進歩すべき余地がないほどに説明に成功しているからではないかという反論である (cf. Wilkes [1984] p. 356)。仮に、第一の指摘で解釈理論によって説明されていないものとして挙げられた現象が、解釈理論の説明すべき対象であるとするならば、解釈理論には進歩すべき余地があるということになるだろう。しかし、それらは解釈理論が説明すべき対象ではない。それゆえ、第二の指摘もまた、解釈理論および命題的態度を消去すべき根拠になるとは考えられない。さて、問題は第三の指摘である。

(二) 還元主義の前提と日常的事実論

第三の指摘は、一見する限りでは、認知科学や神経科学の知見に即したものであり、特に命題的態度に関しては、

まったく正しい指摘であるように思われる。現在、認知科学や神経科学の知見に基づいて最も有力な認知モデルと考えられているのはコネクショニズムである。コネクショニズムによれば、機能主義や非法則的一元論といった広義の心脳同一説が考えるように個々の命題的態度と個々の脳状態との同一性を認めることはできない。したがって、命題的態度を扱う解釈理論が、神経科学をはじめとする諸物理科学に還元される見込みはほとんどない。それゆえ、命題的態度は、消去される運命にあるのではないだろうか。この第三の指摘は、解釈理論が諸物理科学に還元される見込みがほとんどないということから、命題的態度が消去されるべきであるということが帰結すると前提している。つまりこれは、命題的態度が実在すべきものであるならば、個々の命題的態度は個々の脳状態に還元されなければならないという前提である。以下では、この前提を「還元主義の前提」と呼ぶことにしよう⁽⁶⁾。

第三の指摘に対する反論は、この前提の妥当性を疑う。G・グラハムとT・ホーガンによれば、解釈理論が諸物理科学に還元可能でない限り、命題的態度に関する実在論は真ではありえないという消去的唯物論の前提は不当な前提である (Graham and Horgan [1981] pp. 71-72; Horgan and Graham [1991] pp. 108-110)。またL・R・ベーカーも、消去的唯物論が、命題的態度の実在性は諸物理科学によって正当化されなければならないことを前提している」と指摘し、それは一般的な意味での理論と自然科学的理論とを混同する誤りであると批判している (Baker [1995] pp. 67-74)。

道具主義もまた、命題的態度の実在性を否定するものとして理解される限りで、この前提を共有していると言える。道具主義では、命題的態度は実在者ではなく、理論で用いられる概念的な道具に過ぎないと理解されるが、それはまさに、命題的態度を個々の脳状態と同一のものとして位置づけることができないからに他ならない。ここには、個々の脳状態と同一のものとして位置づけられない限り、実在性は認められないという還元主義の前提があると言えよう⁽⁷⁾。また、還元主義の前提は、個々の命題的態度を個々の脳状態と同一視しようとする広義の心脳同

一説の動機にもなっていると考えられる。以下では、広義の心脳同一説のように、還元主義の前提を認めただ上で命題的態度の実在性を擁護しようとする立場を「科学的事実論」と呼ぶことにする。グラハムらに従えば、還元主義を前提する点で、科学的事実論もまた消去的唯物論と同様の誤りを犯しているのである。

しかし、なぜ還元主義の前提は妥当な前提であると言えることができないのだろうか。科学的事実論者や消去的唯物論者は、次のように還元主義の前提を擁護するかもしれない (cf. Ramsey, Stich and Garon [1991] p. 97)。「まず、解釈理論に従って命題的態度の実在性にコミットするということは、命題的態度に因果的役割を帰すことに他ならない。そして、命題的態度に因果的役割を帰すということは、個々の命題的態度が、行為の原因である個々の脳状態に還元されるということに等しい」。

確かに、命題的態度の実在性を保証するには、命題的態度に何らかの因果的役割を帰す必要があるかもしれない。しかし、命題的態度に何らかの因果的役割を帰すということが正しいとしても、それはせいぜい、命題的態度による行為の説明すなわち行為の解釈が、なぜその行為が生じたのかを説明する「行為の生起の説明」になっているということに過ぎない。もし、命題的態度による行為の説明が行為の生起の説明であるということが、個々の欲求や信念と個々の脳状態の同一性を含意するとすれば、還元主義の前提は妥当な前提であると言えるだろう。しかし、行為の生起の説明であるということは、命題的態度と脳状態の個別的同一性を含意しない。ホーガンらによれば、命題的態度による行為の説明が行為の生起の説明であるためには、適切な反事実的条件文が成立すれば十分である (Horgan and Graham [1991] p. 127; Baker [1995] pp. 17-18, 27, 98-99, ch. 5)⁽³⁰⁾。つまり、「それらの欲求、信念を持つていなかったとしたら、その行為は生起しなかった」という反事実的条件文が有効な説明として成立するならば、十分に、それらの欲求、信念によって行為の生起は説明されるのである。確かにこれは、現象の生起の説明一般についてのわれわれの日常的直観にも一致する。たとえば、われわれが「外務大臣の更迭のために内閣の支持率

は急落した」といった説明を理解するときには、「外務大臣の更迭」や「内閣支持率の急落」といった出来事が何らかの物理的出来事に還元されることによってこの説明が保証されるなどは考えないだろう。そこで理解されていることは、「外務大臣の更迭がなければ、内閣の支持率は急落しなかった」という反事実的条件文が説明として有効であるということに過ぎないように思われる。

しかし、なぜ命題的態度や行為について以上のような反事実的条件文が成立するのだろうか。命題的態度や行為について反事実的条件文が成立するということは、どのようなことなのだろうか。それは、実質的には、問題の欲求、信念によって行為が包括的に理由づけられるということに等しい。ある欲求、信念が行為を包括的に理由づけるということは、主体が持つその他のさまざまな欲求、信念に照らした上で、それらの欲求、信念が行為を最も合理化するということである。このように、それらの欲求、信念が、行為を包括的に理由づけるからこそ、「それらの欲求、信念がなかったとしたら、その行為は生起しなかった」という反事実的条件文は成立する。しかるに、このような行為の包括的な理由づけによって行為の生起が説明されるときには、D・デイヴィッドソンの「行為の因果説」(Davidson [1980]) のように、他の欲求、信念ではなく、まさに行為の実際の理由となる欲求、信念が行為を引き起こしていると考える必要はない (cf. 信原 [1999] 第二章)。行為の因果説からは命題的態度と脳状態の個別の同一性が示唆されるが、このように、行為の包括的理由づけは行為の因果説を必要としない。それゆえ、行為の包括的な理由づけに基づく反事実的条件文が成立すれば、命題的態度と脳状態の個別的同一性に訴えることなしに、十分に行為の生起を説明することができるのである。

これに対しては、次のような反論があるかもしれない。「命題的態度が実在することを主張するためには、それが何らかの経験的理論、理論的措定物である必要がある。それゆえ、命題的態度の実在性を主張するためには、命題的態度が何らかの自然科学的理論の理論的措定物であることを要求する還元主義の前提を認めなければならない

のではないだろうか。

しかし、この反論も妥当ではない。ホーガンらは、解釈の概念枠組みが経験的「理論」であることを否定しているわけではない。否定されているのは、理論であるためには「自然科学的な」理論でなければならないという考えに過ぎない (Horgan and Graham [1991] pp. 110-111; Baker [1995] pp. 69-74)。ホーガンらによれば、日常的(ないし常識的)な説明や予測に使われる一群の反事実的条件文は、「日常的(ないし常識的)な理論」を構成している。還元主義の前提によれば、この「日常的な理論」が理論であるためには、自然科学的理論へ還元可能でなければならない。しかし、ホーガンらによれば、この要求は妥当な要求ではない。日常的理論は、一群の反事実的条件文から構成されていると言え、仮に自然科学的理論に還元不可能であるとしても、十分に理論であると言いうことができる。そして、それらの反事実的条件文が説明や予測といった実践において有効性を持つ限り、それらによって構成されている理論は正しい理論であると言いうことができる。解釈理論はまさに一つの正しい日常的理論であるがゆえに、そこにおいて存在措定される命題的態度は実在すると十分に言えるのである。

このように、還元主義の前提は不当であり、日常的な理論はその自律性を十分に認めることができる。命題的態度は、行為の生起を説明する正しい日常的理論において役割を果たす理論的措定物である限りで、十分に実在性を認めることができるのである。以上のように、還元主義の前提を認めることなく、日常的理論の自律性に訴えることで、命題的態度の実在性を擁護しようとする立場を「日常的実在論」と呼ぶことにしよう⁽⁹⁾。

(三) 実践的実在論としての日常的実在論

さて、このような命題的態度に関する日常的実在論の可能性が認められる以上、一見する限り、消去主義に対して命題的態度の実在性は十分に擁護可能であると言いうことができるように思われるかもしれない。しかし、まだそ

の結論を導き出すことはできない。それは、消去的唯物論とは異なる形で日常的实在論の可能性を否定しようとする余地が消去主義にあるからである。つまり、消去的唯物論が消去主義のありうる唯一の形態であるわけではないということである。それでは、消去主義は日常的实在論に対してどのような形で批判を加えることができるだろうか。

先に見たように日常的实在論によれば、あるもの实在性は、それを存在指定する理論が正しい理論である限りで保証される。そして、その理論が正しい理論であるということは、自然科学的理論であれ、日常的理論であれ、その理論を構成する一群の反事実的条件文が説明や予測において有効である限りで保証される。つまり、消去的唯物論や科学的实在論があくまでも自然科学的理論への還元可能性に基づいて实在性を理解するのに対して、日常的实在論は、ともかく反事実的条件文が説明や予測といった実践において有効であるならば、その反事実的条件文によって構成される理論が自然科学的理論へ還元可能であるかどうかにかかわらず、实在性を認める立場なのである。このように、理論間の還元という観点ではなく、実践における有効性という観点から实在性を理解する日常的理論は、「実践的实在論」と呼ぶこともできるだろう⁽¹⁰⁾。

しかし、以上のように実践という観点から命題的態度の实在性を擁護しようとするのだとしたら、実践的实在論という考え方を示すだけでは不十分である。それは、実践的实在論においても、十分な有効性を持たない理論はより有効性のある理論にとって代わられる運命にあると言えるからである。ホーガンらの日常的实在論者は、解釈理論に基づく実践すなわち解釈が有効な実践であることを自明視しているように思われる。しかし、解釈が十分に有効な実践であるということが否定され、より有効な他の実践の存在が示されるとしたら、仮に実践的实在論を採用しているとしても、命題的態度は消去されることになるのである。そして、実際にこの有効性を疑問視する消去主義者は存在する。それゆえ、実践的实在論によって命題的態度の实在性を擁護するためには、このような消去主義

の批判に答える必要があるのである。以下では、このように解釈の有効性を否定することで命題的態度を消去しようとする消去主義を「実践的消去主義」と呼ぶことにしよう。

三、理論とシミュレーション

消去的唯物論をめぐる以上の議論では、解釈の概念枠組みは理論として理解されていた。しかし、この理解に議論の余地はないのだろうか。この問題をめぐっては、一九八〇年代中頃以来、解釈を理論に基づく実践として理解する「理論説」と、解釈を一種のシミュレーションとして理解する「シミュレーション説」の間で論争が繰り広げられてきた。正確に言えば、理論説とシミュレーション説の論争は、消去的唯物論と同様に、第一義的には解釈ではなく素朴心理学に関する論争である。しかしこの論争の焦点は、実質的には、命題的態度を主体に帰属させることによって主体の行為を説明、予測する枠組みの身分にあると行うことができる。それゆえ、ここでは、この論争を解釈の身分に関する論争として位置づける。しかるに、この理論説とシミュレーション説の論争の行方が、消去主義の妥当性の一つの鍵になるとしばしば論じられることがある。それは、解釈の概念枠組みが理論であるということが、消去主義の不可欠の前提であると考えられるからである (cf. Goldman [1989] p. 93; Stich and Nichols [1992] pp. 124-125)。この考えによれば、解釈が理論的実践ではなく、一種のシミュレーションであるとする²と、消去主義の議論は妥当ではないことになる。しかし、この論争の帰結は本当に消去主義の妥当性に対して決定的な帰結たりうるのだろうか。本節の問題は、この論争の決着の行方を検討することではなく、あくまでも、論争の帰結と消去主義の妥当性の関係を明らかにすることである。この問題に取り組むためにも、まずは理論説とシミュレーション説との論争を概観することにしよう。

三・一、理論説とシミュレーション説

そもそも、この論争は、消去主義をめぐる哲学的な議論とは独立に、認知科学の領域にそのきっかけを持つ¹¹⁾。その発端は、命題的態度を主体に帰属させることによって主体の行為を説明、予測する能力がチンパンジーにあるかどうかを問題にした一九七〇年代末の研究にある (Premack and Woodruff [1978])。この能力の有無をめぐる研究は、その後、幼児や自閉症児をも対象とするようになり、さまざまな経験的事実が明らかになった。

たとえば、それらの認知科学における実験の一つに「誤信念課題」がある。これは、被験者である幼児に「Aくんは、チョココレートを引き出しにしまってから部屋の外へ遊びに行きました。Aくんが外で遊んでいる間に、Bさんがチョココレートを引き出しから出して棚の上に隠してしまいました。部屋に戻ってきたAくんは、チョココレートがどこにあると思いますか?」といった質問をして、正しく答えることができるかどうかを確認する実験である。ここでは実験結果の詳細を記すことはできないが、興味深いことに、幼児は四歳前後になるまでこの課題に正しく答えることができない (Winner and Penner [1983])。つまり、「引き出し」と答えることができず、たとえば「棚の上」などと答えてしまうのである。また、自閉症児に関する研究によれば、自閉症児もまた一般的に、この課題に正しく答えることができない (Baron-Cohen, Leslie and Frith [1985])。四歳未満の幼児や自閉症児が、このような能力の欠如を示すのは、一体どうしてなのだろうか。

このように、さまざまな経験的事実が明らかになるにつれ、誤信念課題に正しく答えるというこの能力がいかなる能力であるのかが問題となった。しかるに、誤信念課題で要求されているのは、偽とみなされる信念を主体に帰属させることによって主体の行為を予測するということである。これは解釈の一つに他ならない。このように、上記の一連の経験的研究で問題となっているのは、解釈とはそもそもいかなる実践であるのかという問題に他ならないのである。認知科学では、この能力の所有を意味して、「心の理論を持っている」という表現が使用された

(Pernack and Woodruff [1978] p. 515) こともあり、解釈は理論的実践として理解される傾向にあった⁽¹²⁾。それに対して、一九八〇年代中頃、哲学者たちの間からシミュレーション説が提起された。このシミュレーション説の登場によって、論争の端緒が開かれたのである。それでは、理論説とシミュレーション説とはより具体的にはどのような立場であるのか。以下ではそれらを順に見ることにしよう。

(一) 理論説

理論説によれば、解釈は基本的には、物理学などの経験的理論の知識を用いる実践と同様の理論的実践である。理論説が「理論」ということで強調するのは、一群の法則から構成される演繹的体系をなし、理論的措定物からなる存在論を持っているという点である。

まず、理論説によれば、物理理論が一群の法則から構成されるように、解釈の概念枠組みは一群の法則から構成される演繹体系をなしている。たとえば、チャーチランドは、次のような一群の法則が解釈の概念枠組みを構成していると言っている (Churchland [1981] p. 5)⁽¹³⁾。

$\forall x \forall p \forall q [(x \text{ は } p \text{ と信じている}) \wedge (x \text{ は } p \text{ ならば } q \text{ と信じている})] \supset (x \text{ は } q \text{ と信じている})$
 $\forall x \forall p \forall q [(x \text{ は } p \text{ と欲している}) \wedge (x \text{ は } q \text{ ならば } p \text{ と信じている})] \supset (x \text{ は } q \text{ を為す})$

また、理論説によれば、物理理論が素粒子などの理論的措定物からなる存在論を持つように、解釈の概念枠組みは命題的態度という理論的措定物からなる存在論を持っている。このように、解釈の概念枠組みはまさに経験的理

論の一つであり、それゆえ、それをを用いる解釈は理論的実践なのである。

理論説によれば、誤信念課題に関する実験結果は、理論的知識の有無によって説明される。たとえば、4歳未満の幼児の多くが誤信念課題に正しく答えることができないのは、彼らがまだ解釈理論の知識を獲得していないからである。同様に、自閉症児が誤信念課題に正しく答えることができないのも、何らかの原因で彼らがその理論的知識を獲得することができないためであると説明される。

(二) シミュレーション説

以上のように、理論説によれば、解釈は解釈理論の知識に基づく実践として理解される。しかし、シミュレーション説を唱えるR・M・ゴードンやA・I・ゴールドマンは、われわれがそのような理論的実践を行っているとは考えられないと言う。それでは、シミュレーション説とはどのような立場なのだろうか。

シミュレーション説によれば、解釈とは、自分が解釈対象と同じ心の状況にあったらどうするかを想像する「心的シミュレーション」に他ならない。たとえば、A氏が何をするかを解釈に基づいて予測することとは、自分がA氏と同じ心の状況にあったらどうするかをシミュレーションすることなのである。この「心的シミュレーション」とは、自らの実践的推論の過程をいわば「オフライン」の状態で使用することに他ならない (Gordon [1986] p. 70. cf. Stich and Nichols [1992] p. 127)。われわれは、ある一群の欲求、信念を前提とする実践的推論をおこなっている行為を為すと理解される⁽⁴⁾が、この実践的推論の過程を「オフライン」で使用するということは、仮想的な欲求、信念を实践的推論の前提とすることである。仮想的な欲求、信念ではなく、自らの実際の欲求、信念を入力して、実践的推論を「オンライン」で遂行してしまったら、それは単に自らの行為を実際に遂行するだけのことになってしまう。シミュレーション説によれば、われわれは、他者の欲求、信念を仮想的に入力する「オフライン」

の実践的推論から出力される仮想的な行為（ないし仮想的な意図）に基づいて、他者の行為を予測しているのである。

したがって、心的シミュレーションをうまく遂行するためには、他者の欲求、信念と同一の欲求、信念を仮想的に入力しなければならぬ。たとえば、囲碁の相手が次にいかなる手を指してくるかをシミュレーションするためには、相手がそのときに何を信じているか、またどうしたいと思っているのかを適切に判断しなければならない。もし相手が自分よりも囲碁が下手だとしたら、定石に関する自分の知識をすべて入力すべきではないだろう。このように、適切な心的シミュレーションを行うためには、信念や欲求の個人差を考慮に入れなければならない。しかし、個人差をあらかじめ完全に把握することはできない。したがって、とりあえずは、違いが明らかになっている欲求、信念のみを考慮して、それ以外は自分と同じ欲求、信念を持っているものとしてシミュレーションを行うという方針をとることになる（Gordon [1986] p. 65; Goldman [1989] p. 90）。シミュレーション説によれば、解釈とは、そのようなシミュレーションの試行錯誤を繰り返して、適切なシミュレーションを探り当てる実践に他ならないのである⁽¹⁵⁾。

シミュレーション説では、行為の予測のみならず、行為の説明もまた、以上のような心的シミュレーションによって理解される。行為を説明するときには、まず、説明すべき行為と同一の行為を仮想的出力とするシミュレーションを求めて試行錯誤する。そして、そのようなシミュレーションが見出されたときに、その仮想的入力である欲求、信念によって、その行為は説明される（Goldman [1989] p. 82; Gordon [1992] p. 115）。このように、シミュレーション説では、行為の説明は心的シミュレーションの逆算的利用として理解されるのである⁽¹⁶⁾。また、行為を出力する実践的推論だけでなく、命題的態度を出力する理論的推論を「オフライン」で使用することによっても心的シミュレーションを行うことができる。この場合には、他者の命題的態度を予測することができ、またそれを逆算的

に利用すれば、他者がどうしてその命題的態度を持っているのかを説明することもできる。

それでは、誤信念課題の実験結果はどのように説明されるのだろうか。シミュレーション説によれば、四歳未満の幼児が誤信念課題に正しく答えることができないのは、彼らがまだ心的シミュレーションの能力を獲得していないからに他ならない。同様に、自閉症児が誤信念課題に正しく答えることができないのも、彼らが何らかの原因で心的シミュレーションの能力を獲得することができないためであると説明される。シミュレーション説によれば、この点は、自閉症児が一種のシミュレーションである「ごっこ遊び」を苦手としているという実験結果とも符合する (Gordon [1986] p. 70; Goldman [1989] p. 87)。

三・二、実践の代替可能性

それでは、理論説とシミュレーション説のどちらが正しいのだろうか。結論だけを言えば、現時点では、決定的な論点が示されているようには思われぬ (cf. 鈴木 [2001])¹⁷⁾。しかし、先に述べたように、ここでの問題はこの論争に決着をつけることではない。問題はむしろ、仮にシミュレーション説の正しさが示されたとして、それによって消去主義が反駁されることになるのかどうかである。以下ではこの点について考えることにしよう。

しかしその前に、そもそもシミュレーション説は、理論説にとって代わりうるだけの明確な代案となっているのだろうか。まず、この点を考える必要がある。そうでなければ、解釈の概念枠組みが理論であるかどうかという問題はそもそも実質がないことになってしまうからである。前節での特徴づけを見る限りでは、シミュレーション説と理論説の間には明確な対比があるように思われる。しかし、シミュレーション説を唱える論者が理論説に対して提示する批判が理論説を反駁するに十分なものであるかどうかを検討すると、以下に示すように、この対比はそれほど自明なものではなくなってしまうようにも思われる。

シミュレーション説を唱える論者は、いかなる点で理論説が不適切だと考えているのだろうか。ゴードンやゴールドマンによれば、まず、われわれが解釈理論の知識を明示的に利用しているようには思われない (Gordon [1986] pp. 61-63; Goldman [1989] pp. 79-80)。また、理論説は、仮説形成や演繹といったあまりに高度な認知能力を幼児に対して要求することになる (Goldman [1989] pp. 80-81)。ゴードンやゴールドマンは、これらの論点が理論説の説得力を奪うことになると考える。

この批判は、理論説を反駁するに十分だろうか。確かに、日常的直観に照らしてみても、少なくとも他者とのコミュニケーションが円滑に為されている限り、そのコミュニケーションを支える解釈の知識は何ら明示化されているようには思われない。しかし、S・スティッチとS・ニコルスによれば、それは、いかなる意味でも理論的知識を利用していないということを含意するわけではない。解釈理論の知識は、むしろ、「暗黙的な知識 (Tacit knowledge)」として理解されるべきものである (Stich and Nichols [1992] pp. 134-135)。スティッチとニコルスは、暗黙的な理論的知識のその他の例として、文法の知識を挙げる。文法の知識は、通常、理論的知識として理解されるが、われわれは、文法の知識を明示的に利用せずに言語を使用している。しかし、それは、われわれがその文法の知識を持っていないということを意味しない。文法の知識は、主体にとって明示的である必要のない、暗黙的な理論的知識なのである。スティッチとニコルスによれば、幼児に対してあまりに高度な認知能力を課すことになるということも、同様に、暗黙的知識に言及することで説明可能であり (Stich and Nichols [1992] pp. 136-137)、また、自閉症児が「じっと遊び」を苦手としているということも、それを可能にする理論的知識の欠如として説明可能である (Stich and Nichols [1992] pp. 144-146)。

理論的知識をつねに明示的に利用しているという立場として理論説を理解することは、確かに、理論説の不当な矮小化に他ならないだろう。それゆえ、仮に、日常的なコミュニケーションにおいてつねに明示的な解釈を行って

いるわけではないということがシミュレーション説において適切に説明されうるとしても、この点では、理論説とシミュレーション説の違いを見出すことはできない。しかし、このように暗黙的な理論的知識を認めるということは、構文論的に構造化された脳状態としての「思考の言語」の存在を認めることに等しく、理論説は消去的唯物論の前提となるどころか、消去的唯物論の論拠となるコネクショニズムによって逆に反駁されてしまうことにならないだろうか。

このような反論に対して、ステイチとニコルスは、暗黙的な理論的知識に訴えて理論説を擁護することによって「思考の言語」の存在が含意されるわけではないと言う。それは、暗黙的な理論的知識がコネクショニスト・ネットワークによって実現されていると理解することもできるからである (Stich and Nichols [1992] p. 133; cf. Churchland [1994] pp. 313-315)。したがって、「思考の言語」仮説が誤りであるということが明らかになったとしても、それによって理論説が否定されるわけではない。

これに対しては、暗黙的な理論的知識をこのようにコネクショニズムと両立可能なものとして理解することは、理論説とシミュレーション説の境界を曖昧にしてしまうという反論が生じるかもしれない (cf. Davies and Stone (eds.) [1995] p. 7; Goldman [1989] p. 89)。しかし、この反論はこの限りでは不十分である。解釈がいかなる脳のメカニズムによって実現されているかを問うサブパーソナル・レベルにおいて両者を区別することができないというだけでは、解釈において解釈主体が実際にどのようなことを為しているかを問うパーソナル・レベルにおいても両者を区別することができないということにはならないからである。そして、理論説とシミュレーション説の区別は、まさにパーソナル・レベルでの区別として理解されるべきなのである。

先に見たように、日常的なコミュニケーションにおいてつねに明示的な解釈を行っているわけではないという点では、理論説とシミュレーション説を区別することはできない。それゆえ、パーソナル・レベルにおいて両者を区

別することができるかどうかは、われわれが他者とのコミュニケーションの中で明示的に解釈を行う際に、主体が実際にどのようなことを為していると考ええるかによって決まると言えるだろう⁽¹⁸⁾。

しかし、理論説に対するもう一つの批判について考えると、このパーソナル・レベルでの区別も微妙な問題となるように思われる。それは、「心的なものの非法則性」によって理論説は反駁されてしまうのではないかという批判である (cf. Wilkes [1981] p. 151; [1984] pp. 346-347)。心的なものの非法則性の議論によれば、チャーチランドが想定するような心理法則は成立しない。それは、命題的態度の構成原理である合理性が文脈依存的な全体論的性質を持っているため、各命題的態度をどのように組み合わせるかによって、各命題的態度や各行為の間の合理化関係そのものが変化してしまうからである (cf. 信原 [1991] p. 129)。たとえば、A氏がB氏の論文に対して「素晴らしいね」と言ったとしよう。このとき、A氏がB氏の論文に対して誉め言葉を述べたという信念は、誉め言葉を述べるということはその対象を評価することであるという信念とともに、A氏はB氏の論文を評価しているという信念を合理化するだろう。しかし、その後、A氏が皮肉屋であり、B氏を侮辱したがつていることがわかったとしよう。この場合には、A氏がB氏の論文に対して誉め言葉を述べたという信念は、むしろ、A氏はB氏の論文を評価していないという信念を合理化するだろう。このような事例は、単に、主体が所有する命題的態度の全体によって個々の命題的態度や行為が合理化されるという意味での全体論的性格を示すのみならず、それらの命題的態度や行為の間の合理化関係それ自体がそれを取り巻く文脈によって変化するという強い意味での全体論的性格を示していると考えられる。心的なものの非法則性の議論によれば、一般に法則は文脈独立的に成立する一般化であるのに対して、合理性には以上のような文脈依存的な全体論的性格がある。それゆえに、命題的態度に関してチャーチランドが想定するような心理法則は成立しないと考えられるのである。

この批判に対して理論説はどのように答えることができるだろうか。一見すると、この批判によって理論説は反

駁されてしまうと思われるかもしれない。しかし、心的なものの法則性が成り立つかどうかで理論説とシミュレーション説の論争の決着がつかってしまうとしたら、この論争はあまりにトリヴィアルな論争になってしまうのではないだろうか。もちろん、この論争が実際にトリヴィアルな論争である可能性はある。しかし、ここはむしろ、理論説にとって重要なのは解釈が文脈依存的な大まかな一般化に従った実践であるということに過ぎないと考えるべきではないだろうか。つまり、理論説の言う「法則」を文脈独立的な「厳密法則」として理解する必要はないということである (cf. Churchland [1994] p. 310)。しかし他方では、このように考えることは、理論説とシミュレーション説とのパーソナル・レベルでの区別を微妙なものにしてしまうようにも思われる。文脈依存的な「大まかな一般化」の実質が、さまざまな命題的態度や行為の間の合理化関係をその場の解釈において判断するという以上ではないとしたら、これは、その場その場の心的シミュレーションからどのように区別されるのだろうか。

もちろん、以上の考察は両者の区別が見出されえないということを示してはいない。しかし、この限りでは、理論説とシミュレーション説は明確に区別される立場であると言いつけることはできないように思われる。そして、さらに問題なのは、仮に両者を明確に区別することができることができ、またシミュレーション説が正しい立場であることが示されたとしても、それによって消去主義が反駁されるのかどうかには議論の余地があるということである。

一見すると、シミュレーション説が正しいとしたら、消去主義は反駁されてしまうように思われる。それは、命題的態度がいかなる理論的措定物でもなければ、そもそもそれは消去の対象になりえないように思われるからである。しかし、それは、解釈の概念枠組みが理論であるということが、消去主義にとって不可欠な前提であるとすればの話である。そして、消去主義はそのような前提を持つ必要はない。それは、理論に基づかない実践もまた別の実践にとって代わられうるものだからである (cf. Churchland [1994] p. 312)。つまり、解釈が (シミュレーションであれ何であれ) 非理論的な実践であるとしても、それだけでは、解釈が別の実践によってとって代わられ、

それゆえ、実践の中で存在の意味を与えられる命題的態度の实在性が否定される可能性は何ら排除されないのである。ある実践が他の実践にとって代わられるのは、他の実践の方がその実践よりも有効な実践である場合である。したがって、実践的消去主義のように、解釈の有効性を否定し、解釈は他のより有効な実践によってとって代わられるべきであると主張する議論があるとしたら、命題的態度の实在性を擁護するにはその議論に答えなければならぬのである。

このように、シミュレーション説によって命題的態度を擁護することができるとかという問題もまた、解釈が有効な実践であるかどうかという二・二節の最後に提起された問題に行き着く。つまり、解釈が理論的実践であるうがなかるうが、命題的態度の实在性を擁護するためには、「解釈の有効性」に疑問を呈する実践的消去主義に答えなければならぬのである。次節では、この実践的消去主義の問題を考察し、命題的態度の实在性について結論を示したいと思う。

四、命題的態度の実践的实在性

命題的態度の实在性は否定されるべきものであるのかどうか。結局のところ、この問題は解釈が有効な実践であると言えるかどうかにかかっている。解釈は有効な実践ではなく、より有効な他の実践があると言うことができる。とすれば、解釈が理論的な実践であろうがなかるうが、解釈は他の実践にとって代わられ、命題的態度の实在性は否定されなければならない⑩。とは言え、ホーガンらが自明視しているように、解釈は有効な実践であるというのがわれわれの日常的な直観だろう。したがって、举证責任は実践的消去主義者の側にあると言える。それゆえ、まずは解釈の有効性に対して疑念を示す実践的消去主義の議論を提示し、その懐疑に対してどのように答えるべきかを考えていくことにしよう。

四・一、実践的消去主義

実践的消去主義によれば、解釈は有効な実践ではないがゆえに、命題的態度の実在性は否定されるべきである。この実践的消去主義を唱える論者は実際に存在する。特に、信原幸弘はその議論を具体的に提示している（信原 [1999] pp. 71-74; [2000] pp. 195-200）。

信原は習慣的行為に注目する。習慣的行為は、命題的態度を理由として説明、予測される行為の典型例である。たとえば、A氏は毎朝野菜ジュースを飲むという習慣を持っていたとしよう。そして、A氏のこの習慣的行為は、つねに健康でいたいという欲求と、毎朝野菜ジュースを飲めばつねに健康でいられるという信念を理由として説明されるとしよう。ここで信原は、何らかのきっかけでA氏が、毎朝野菜ジュースを飲めばつねに健康でいられるとは信じなくなり、毎朝野菜ジュースを飲むべき理由がなくなったとしたらどうだろうかと問う。解釈に基づけば、A氏は毎朝野菜ジュースを飲むべき理由がなくなったのだから、野菜ジュースを飲まなくなると考えられるだろう。しかし、習慣的行為がどのようなものであるかを振り返ってみれば、A氏がこれまでの習慣に基づいて、なおも毎朝野菜ジュースを飲むでしようという可能性は否定できないだろう。

これは一体どういうことだろうか。信原によれば、A氏は、毎朝野菜ジュースを飲むべき理由を持っていないのだから、なおも毎朝野菜ジュースを飲んでしまうというA氏の行為をその理由である欲求、信念によって説明することはできない。つまり、解釈はこの事例をうまく説明することができないのである。それでは、A氏のこの行為（ないし身体運動）はどのように説明されるべきなのか。信原によれば、それは、適当な行動解発機構によって、より具体的に言えばコネクショニズムのメカニズムによって因果的に説明されるべきである（信原 [1999] p. 73; [2000] p. 198）。しかるに、A氏のこの習慣的行為が欲求や信念によってではなく、コネクショニズムのメカニズムによって説明されるべきであるとすれば、習慣的行為は一般的にも、このコネクショニズムのメカニズムによつて説明されるべきであるとすれば、習慣的行為は一般的にも、このコネクショニズムのメカニズムによつて

て説明されるべきではないだろうか。A氏の問題の行為とそれまでの習慣的な行為との間には、その生起に関して何の違いも生じていないように思われるからである。

このように、欲求、信念に基づく解釈が、解釈の典型的対象である習慣的行為の説明にとってまったく有効ではなく、それらはむしろコネクシヨニズム的メカニズムによって説明されるべきであるとするとすれば、解釈の有効性が自明視されていた範囲の大部分においてその有効性が否定されることになるだろう。しかし、残りの範囲においてさえも解釈は有効なのだろうか。習慣的行為の説明としての有効性が否定されると、解釈の有効性はより一般的に疑わしいものになるように思われる。解釈はいかなる行為の説明にも有効ではなく、コネクシヨニズムなどの認知科学に基づくより有効な実践に完全にとって代わられるべきなのではないだろうか。このようにして信原は、命題的態度は消去されるべきであると結論する（信原 [1999] pp. 79-80; [2000] p. 200）²⁹。さて、信原の以上の議論に対して、解釈の有効性を擁護することはできるだろうか。

四・二、説明対象の同一性と実践の眼目

ベイカーによれば、解釈とコネクシヨニズムなど自然科学的な認知科学は、両者の説明対象が異なるがゆえに、フロギストンによる燃焼理論とそれにとって代わった酸素による燃焼理論の関係と同様の関係にあるとは考えられない（Baker [1995] p. 134-135）。解釈の説明対象である行為や命題的態度は解釈の概念枠組みにおいてはじめて意味を持つ。それゆえ、解釈の概念枠組みを利用しない自然科学的な認知科学では、行為はそもそも説明対象ではありえないということになる。このように、解釈と認知科学が説明対象を共有していないのだとしたら、いかにして、解釈よりも認知科学に基づく実践の方がより有効であるという比較ができるのだろうか。ある実践が他の実践にとって代わりうるのは、それらの実践が説明対象を共有する場合に限られるのではないだろうか。

このような「説明対象の同一性」に訴える議論が妥当であるとすれば、そもそも、自然科学的な認知科学の実践は解釈にとって代わるべきより有効な実践ではありえないということになる。それゆえ、この議論が妥当であるならば、信原の議論によっては、解釈よりも認知科学に基づく実践の方がより有効であるということは示されていないことになる。確かに、一見する限り、フロギストンによる燃焼理論とそれにとって代わった酸素による燃焼理論は、燃焼現象という説明対象を共有しているように思われる。しかし、この「説明対象の同一性」に訴える議論は一般的に妥当な議論であるとは言えない。たとえば、チャーチランドは、古典力学とそれにとって代わった特殊相対性理論の間でも説明対象は共有されていないと指摘する (Churchland [1988] pp. 117-118)。特殊相対性理論における「時間」や「空間」、「質量」といった概念は、まさに特殊相対性理論においてはじめてその意味を与えられるからである。しかし、この事実は、古典力学が特殊相対性理論にとって代わられたという事実を何らくつがえすこととはないだろう。また、観察の理論負荷性を認めれば、フロギストンと酸素の場合も同様に説明対象は共有されていないことになる。このように、二つの実践の間で説明対象が共有されていないということによっては、それらの一方が他方にとって代わるという可能性を排除することはできないのである。

それでは、説明対象が異なるにもかかわらず、なぜ一方の実践は他方の実践によってとって代わられるのだろうか。両者の実践の有効性はいかにして比較されるのだろうか。それは、二つの実践が、実践の成功、不成功を評価する尺度、つまり実践の「眼目」を共有しているからである。たとえば、古典力学と特殊相対性理論は、自然現象を統一的かつ包括的に説明するという自然科学的実践の眼目を共有しているからこそ、説明対象を異にするにもかかわらず、後者が前者にとって代わるということが生じたのである。したがって、解釈と自然科学的な認知科学の実践が説明対象を異にするとしても、両者が実践の眼目を共有していると言えるのならば、後者が前者にとって代わるということは十分に理解可能なことである。

結局のところ、問題は、同一の眼目に照らして解釈が自然科学的な認知科学の実践よりも有効性の欠ける実践であるかどうかということになる。しかし、そもそも解釈と自然科学の実践は眼目を共有する実践なのだろうか。実践的消去主義から命題的態度の実在性を擁護する鍵は、まさにこの点にある。次節では、この点について考察しよう。

四・三、解釈の眼目と有効性

解釈と自然科学の実践はそもそも眼目を共有する実践なのだろうか。まさに、信原の議論の妥当性を評価することが、その問いに対する答えの手掛かりとなる。信原は、習慣的行為の理由とされる欲求、信念によっては習慣的行為を説明することができないと言う。その根拠は、A氏の事例において、理由とされる欲求、信念をA氏が持たなくなったとしても、A氏は問題の習慣的行為を為してしまうと考えられるからである。確かに、それでもA氏がその習慣的行為を為してしまった場合、為された習慣的行為トークンの生起に関して、これらの欲求、信念は何ら説明上の役割を果たしているには思われない。しかし、その行為トークンの解釈は、それだけで独立に成立するわけではない。その解釈に関係するその他の解釈をも視野に入れた場合には、欲求、信念が一般的に何の説明上の役割も果たさないとはいえないのではないだろうか。

たとえば、「なぜその習慣的行為を為したのか」と指摘されたとしたら、A氏はどうするだろうか。もしA氏が「なぜかはわからないが体が勝手に動いてしまったんだ」と答えたとしたら、A氏の問題のふるまいは、「行為」ではなく「単なる物理的身体運動」に過ぎなかったということになるだろう。あるいは、A氏が自らの非を認め、何らかの弁解を述べるとしたら、A氏の行為は「不合理な行為」として理解されるだろう。これに対して、A氏が適切な理由のゆえに習慣的行為を為した場合には、このようなやりとりはそもそも生じない。それはまさに、問題の

欲求、信念と行為が適切な理由関係を形成しているからである。このように、事後のやりとりを含むその他の状況を考慮するならば、A氏の問題のふるまいは、「単なる物理的身体運動」と「不合理な行為」のいずれとして理解されるにせよ、通常の合理的な行為と同様に扱われるべきではない。まず、この違いを明示的に考慮していない点で、信原の議論における一般化には議論の余地がある。

しかし、これは、合理的な行為の場合でのみ、欲求、信念が説明上の役割を果たしているということではない。A氏のふるまいが不合理な行為である場合においても、それが「行為」である以上、何らかの欲求、信念が理由として説明上の役割を果たす。だからこそ、A氏のふるまいは不合理な「行為」として理解され、A氏の発話は自分の非を認める「弁解」として理解されるのである。また、A氏のふるまいが「不合理な」行為であると言えるのは、習慣的行為の理由である信念の帰属が否定されるからであるが、それは、A氏のその他の行為（たとえば、「毎朝野菜ジュースを飲んで健康には無関係らしいよ」といった発話行為）の解釈においてはじめて保証されることである。このように、解釈という実践は他のさまざまな解釈と本質的な関係をなす全体論的な実践なのである⁽²⁾。これは、解釈の説明対象である命題的態度や行為が、合理性に基づく全体論的關係を形成するからに他ならない。解釈とは、命題的態度や行為を個別的に説明したり、予測したりすることを眼目とする実践ではなく、それらの命題的態度や行為を合理的ネットワークの中に位置づけることを眼目とする実践なのである。

他方、自然科学の実践にはこのような全体論的な眼目はない。もちろん、法則に基づいて現象を統一的、包括的に説明、予測しようとするという点では、自然科学の実践もある意味で全体論的であると言える。また、デュエムIIクワイン・テーゼによれば、自然科学の理論と食い違うデータが得られたとき、原理的には、理論を構成するなどの文を訂正することもできる。つまり、自然科学の理論は、それを構成する個々の文においてではなく、理論全体として検証や反証を受けるのである (Quine [1951])。この意味でも、自然科学の実践は全体論的であるという意味

があるように思われる。しかし、自然科学の実践の「眼目」、すなわち自然科学の説明や予測の成否は、あくまでも個々の現象に関する説明や予測の成否を基本単位として評価される。たとえば、人工衛星の地球上の落下地点についての説明、予測は、さまざまな物理法則に基づく以上、その他の現象の説明、予測と無関係ではない。人工衛星の落下地点の説明、予測は、その他の現象の説明、予測と統一的かつ包括的な体系を形成することが求められる。しかし、人工衛星の落下地点についての説明、予測の第一の眼目は、人工衛星の現実の落下地点との不一致に他ならない。それゆえ、この説明、予測が失敗するとしたら、その他の説明、予測と体系的な関係を形成しているとしても、その説明、予測は失敗として評価される。この意味で、自然科学の実践の「眼目」は、原子論的な性格を持っているのである (cf. Brandom [1979] p. 191)。

以上のような考えは、デュエムクワイン・テーゼに反しているわけではない。確かに、理論と食い違うデータが得られたときには、デュエムクワイン・テーゼが言うように、理論を構成するどの文を訂正することも可能である。しかし、これは、自然科学の説明、予測の成否が、個々の現象の説明、予測の成否を基本単位としているということをくつがえすわけではない。デュエムクワイン・テーゼが示していることは、単に、個々の現象の説明、予測の失敗を、理論のどの部分に帰してもよいということに過ぎない。たとえば、人工衛星の落下地点が理論の予測地点と一致しなかったとする。デュエムクワイン・テーゼによれば、この予測の失敗は、運動の基本法則の誤りによるものとして理解することもできるし、観測データの誤りによるものとみなすこともできる。もちろん、この予測の失敗が基本法則の誤りによるものとして理解されたとしたら、この予測の失敗は、その基本法則に基づくその他の説明、予測の評価に影響を及ぼさだろう。しかし、これは、この予測がまず第一に人工衛星の落下地点という現実との不一致に基づいて「失敗」と評価されるということを否定するわけではない。このように、自然科学の説明、予測の成否は、あくまでも、個別的な説明、予測の成否を基本単位としてしているのである。

それに対して、解釈の第一の眼目は、個々の命題的態度や行為について、単に現実と一致する説明や予測を与えることにあるわけではない。解釈の第一の眼目は、個々の説明、予測が、他の説明、予測と合理的な関係を形成することにある。もちろん、解釈においても、個々の説明、予測のほとんどが失敗している場合には、全体として失敗と評価される。しかし、解釈の場合には、それぞれの説明、予測が全体として合理的関係を形成するという第一の眼目が満たされているならば、ごく一部の説明、予測の「失敗」は失敗とは理解されない。その「失敗」をもたらした現象は、互いに合理的関係をなす諸説明の中で「不合理性」として位置づけ直されるからである。このように、解釈の場合、個々の説明、予測の成否は、他の説明、予測との関係の中に位置づけられてはじめて決められる。原子論的な眼目を持つ自然科学の説明や予測と区別するために、このような全体論的に結びついた説明や予測を「理解」と呼ぶならば、解釈の第一の眼目は、まさにこの「理解」にあるのである。

このように、自然科学の実践の眼目が原子論的なものであるに対して、解釈の眼目は全体論的なものである。そして、この眼目の違いは、まさに合理性が文脈依存的な全体論的性格を持つがゆえに、自然現象のように法則化することができないという点に基づいている。自然現象は、文脈独立的な法則に包摂されることによって、説明、予測される。したがって、自然現象の説明、予測の成否は、文脈とは独立的に、その現象が法則に包摂されるかどうかによってのみ評価される。それに対して、命題的態度や行為は、それらを文脈依存的な合理的関係に包摂することによってはじめて説明、予測される。それゆえ、命題的態度や行為の説明、予測の成否は、文脈依存的に、その他の命題的態度や行為の説明、予測との関係においてはじめて決められるのである。W・セラーズの言葉と、それにちなんでJ・マクダウェルが用いる言葉を使えば、命題的態度や行為が位置づけられる「理由の論理空間」(Sellars [1956] p. 76) と自然現象が位置づけられる「自然の論理空間」(McDowell [1994] p. xiv) が根本的に異なる空間であるがゆえに、解釈と自然科学の実践は眼目を共有する実践として理解することができないのである。解

釈の有効性を問う信原の議論において、欲求や信念が習慣的行為を有効に説明していないように考えられたのは、まさに、以上のような解釈の眼目を正当に考慮していなかったからではないかと思われる。習慣的行為の説明において、習慣的行為がその他の行為とどのような関係にあるのかという点を考慮に入れるならば、欲求、信念が習慣的行為の「理解」において何の役割も果たしていないということは帰結しない。むしろ、欲求、信念は習慣的行為の「理解」において本質的な役割を果たしているのである。

以上のように、解釈と自然科学の実践が眼目を共有しているとは言えない以上、両者の実践の有効性がいかにして比較されるのかは決して明らかではない。それゆえ、実践的消去主義の以上の議論に基づく限りでは、解釈が認知科学の実践によってとって代わられるべきであるということは何ら示されていない。これに対して、解釈の眼目それ自体の有効性に議論の余地はないのだろうかという反論があるかもしれない。つまり、解釈のような全体論的な実践はそれ自体として自然科学の実践に比べて有効性を欠いているのではないだろうか。しかし、もしこの反論が、たとえば自然科学の実践の眼目を絶対視し、法則的な説明、予測が可能であるかどうかを基準に解釈の眼目それ自体の有効性を評価しているのだとしたら、それは論点先取である。もちろん、異なる眼目を持つ実践の有効性を比較するための包括的な眼目がありえないということを示されていない。また、自然科学の眼目がその包括的な眼目であるという可能性も排除することはできない。その意味では、解釈が他の実践によってとって代わられる原理的な可能性は排除されない。しかし、これまでの議論では、解釈の有効性を否定すべき実質的な議論が提示されていない以上、命題的態度が消去されるべきであるという理由はまったく認められないのである²²。

結論をまとめよう。解釈が「理解」という独自の眼目を持つ実践であるということを理解するならば、その有効性は実践的消去主義の議論によって否定されないということがわかる。この限りで、実践的実在論をとる解釈主義

の下では、命題的態度の实在性を十分に保証することができるのである。

註

(1) 主体がいかなる行為を為したのかは、適切な理由の帰属により、主体のふるまいがある行為として解釈可能であるときはじめて確定する。逆に言えば、適切な理由がまったく見出されず、解釈が成立しないときには、問題のふるまいは行為ではなく、単なる物理的身体運動に過ぎなかったということになる。たとえば、A氏のふるまいを何らかの行為とみなす適切な理由が見出されなかった場合には、A氏のふるまいは、痙攣か何かで引き起こされた単なる物理的身体運動として理解される。このように、行為の解釈における被説明項であるところの行為は、その解釈が成立してはじめて、説明されるべきものとしての身分が保証されるのである。この意味で、行為の解釈においては、行為の理由である欲求や信念のみならず、行為そのものもまた主体に帰属させられていると言える。したがって、より正確に言うならば、個々の命題的態度と行為が形成する合理的ネットワークが、環境の中で生じた一連のふるまいにかぶせられるということになる。

(2) 詳しくは、信原「一九九九」の第三章を参照のこと。

(3) しかし、デネット自身は他方で、自らの立場を「道具主義」と呼んだことを誤りとし、命題的態度の实在性を擁護する議論を行っている (Dennett [1987] pp. 37-42, 69-81)。結局のところデネットの立場がいかなる立場であるのかは、大いに議論の余地のある問題であるが、本稿でそれを詳細に検討する余裕はない。

(4) 素朴心理学では感情も扱われるが、感情がある種の命題的態度であるのかどうかには議論の余地があるので、ここでは明示しなかった。感情をどのように理解するべきかについての考察は今後の課題としたい。

(5) もっとも、命題的態度以外の心的状態をも扱う素朴心理学そのものに関して、この応答が適用できるかどうかは微妙な問題であるかもしれない。しかし、本章の考察対象は命題的態度に関する消去主義であるので、この問題は棚上げとする。

(6) この前提は、他の消去主義者（たとえば、Stich [1983]、Ramsey, Stich and Garon [1991]）によっても共有されている。

(7) A・クラークもまた、グラハムらと同様に、消去的唯物論の還元主義的前提は不当であると指摘している (Clark [1989] ch. 3, Appendix)。クラークによれば、素朴心理学ないし解釈の概念枠組みは、高次レベルで人々の行動の大まかなパターンを記述するための枠組みであり、それが神経生理学に還元されえないことは、それにとって何ら短所ではない。しかし、クラーク

クが命題的態度の**実在性**についてどのように考えているのかは必ずしも明確ではないように思われる。それゆえ、クラークの見解は、消去的唯物論が理論ないし概念枠組みの道具としての適切性について不当な前提を立てているという見解として理解され、結局のところ、デネットの道具主義に吸収されてしまう余地があるように思われる。

- (8) ホーガンらは、「行為の生起の説明」ではなく、「行為の因果の説明」という用語を用いて議論を行っている。「行為の因果的説明」という用語は、論者によっては、命題的態度と脳状態の個別的同一性を含意するような意味での「行為の因果説」と同義に使われることがある。しかし、ホーガンらが用いるところの「行為の因果的説明」は、そのような「行為の因果説」を指すわけではなく、本稿で「行為の生起の説明」と呼ぶところの日常的な意味での「行為の因果的説明」に過ぎない。それゆえ、行為の因果説との混同を避けるためにも、本稿では「行為の生起の説明」という表現を使用した。

- (9) ホーガンとグラハムは、消去的唯物論、科学的実在論、日常の実在論を、その論者たちのアメリカにおける地域分布に関連づけて、それぞれ「(西部) 世俗主義」「(東部) 教会主義」「南部原理主義」と呼んでいる (Horgan and Graham [1988] p. 107)。

- (10) ベイカーも自らの立場を「実践的実在論 (practical realism)」と呼んでいる (Baker [1995] *passim*)。

- (11) 理論説とシミュレーション説の論争については、Davies and Stone (eds.) [1995] が詳しい。

- (12) 本文でも述べたように、「心の理論を持つている」という表現は、もともと「命題的態度を主体に帰属させることによつて主体の行為を説明、予測することができる」ということを意味する表現である (Prenack and Woodruff [1978] p. 515)。この限りでは、「心の理論」は「解釈の概念枠組み」とほぼ同義であり、それ自体には、必ずしも理論説へのコミットメントがあるわけではない。しかし、「心の理論」という表現は理論説を示唆する面もあるので、以下では、認知科学の研究に言及する際にもこの表現の使用は避けることにする。

- (13) 便宜上、議論に支障が生じない程度に、チャーチランド自身が挙げた法則に修正を加えている。チャーチランドによれば、素朴心理学をこのような心理法則から構成される理論として理解する見方は、W・セラーズ (Sellars [1966]) に由来する (Churchland [1994] p. 308)。また、D・ルイス (Lewis [1972]) などの素朴心理学的機能主義もこの見方に基づいている。

- (14) 解釈主義の観点から言えば、これは「われわれは、ある一群の欲求、信念を前提とする実践的推論をおしてある行為を為すと解釈される」ということに他ならない。

- (15) チャーチランドは、シミュレーション説が正しいとすると、個人差が無視され、われわれの他者理解があまりに制約され

ることになってしまおうと批判する (Churchland [1988] p. 119)。しかし、本文で論じたように、シミュレーションは個人差を無視する実践ではない。個人差は、シミュレーションの試行錯誤の中で把握可能なものであり、それゆえ、他者理解が不当に制約されるわけではない。

- (16) ゴードンは、信念を帰属させる際に逆算的に利用するシミュレーションを、仮想的出力が発話であるようなシミュレーションに限定している (Gordon [1986] pp. 66-68)。しかし、信念による行為の説明は、発話以外の行為を仮想的出力とするシミュレーションの逆算的利用としても理解することができる。それゆえ、信念による説明を理解する際に、ゴードンのような限定をする必要はない。

- (17) 論争において提示されたさまざまな論点を詳しく検討する余裕は本稿にはない。それらの論点の詳細については、Davies and Stone (eds.) [1995] を参照のこと。

- (18) 明示的な解釈が為されるといことは、理論説のみならずシミュレーション説でも認められるだろう。実際、ゴールドマンは、コミュニケーションの中でわれわれが法則に関する知識を明示的に利用するということさえ認める (cf. Goldman [1989] pp. 83, 88)。しかし、ゴールドマンは、法則に関する知識をシミュレーションから帰納的に獲得された知識として理解し、この限りで理論説との違いを強調している。

- (19) これに対しては、解釈という実践はそもそも原理的に放棄不可能ではないかと考える論者がいるかもしれない。たとえば、グラハムとホーガンは、解釈という実践を放棄することは、実践的に不可能であると主張する (Graham and Horgan [1988] pp. 72-73)。その理由は、解釈を放棄すべきであると主張する消去主義者自身が、まさに解釈を行っているという点にある。たとえば、ある消去主義者が「命題的態度に関する実在論者は命題的態度が実在すると信じているが、実際には命題的態度は実在しないと認めるべきである」と主張するでしょう。グラハムとホーガンによれば、その消去主義者は、このような主張において解釈にコミットしてしまっているのである。グラハムとホーガンは、消去主義がア・プリオリな矛盾を主張しているとは言わない。しかし、グラハムとホーガンによれば、ここには「実践的な」矛盾があり、それは、解釈の放棄が不可能であることを示唆するのである (Horgan and Graham [1991] pp. 122-123; cf. Baker [1995] p. 235)。

しかし、この「実践的矛盾」に訴える議論は妥当であるとは言えない。チャーチランドの言うように (Churchland [1994] p. 31)、消去主義者が解釈にコミットする形で自説を唱えるということは独立に、将来において実際に解釈が放棄され、それに代わって、命題的態度や行為の概念を使用しない何らかの認知科学の実践が採用されるとすれば、そのことにおいて、

消去主義が主張しようとしたことは成立していることになる。消去主義は、いわば「登り終えた後に投げ捨てられるべき梯子」の役割を果たすのである。

実践的矛盾に訴える以上の議論は、このような再反論に対して効力を持っていないように思われる。また、このことは、解釈の有効性を実際に否定しようとする実践的消去主義に対して、積極的に解釈の有効性を示す反論としても効力を持たない。それは、せいぜい、われわれの実践の中に解釈という実践が深く浸透しているということを示すに過ぎず、その実践が有効であるということを保証するわけではないからである。

(20) 信原は、発話(および内語)そのものないし発話(および内語)への傾向性として理解する限りでは、命題的態度の存在を認める(信原[1999] pp. 76-78; [2000] pp. 188-193)。しかし、それらは、解釈において行為一般の理由として言及される命題的態度と同じものとして理解することはできない。

(21) 解釈主義の下で、そもそも、不合理な行為を「不合理な」行為として位置づけることができるのかどうかには議論の余地があるが、本稿でそれを詳細に検討する余裕はない(詳細については金杉「近刊」を参照のこと)。しかし、仮にそれが可能であるとすれば、不合理な行為の解釈は本稿で述べたような意味で全体論的な実践でなければならない。

(22) 消去主義者は、そもそも解釈の有効性が否定される原理的、合理的な可能性が認められる限りで、自らの主張は認められたと言いかもしれない。しかし、その可能性が原理的には排除されないということは、唯物論などの存在論を前提せずに実践的な観点から命題的態度の実在性を理解する方針をとった時点で当然のことである。仮に解釈の概念枠組みが理論であるとしても、反証を免れた理論はありえないというクワインの全体論を認めるならば、解釈の有効性が否定される可能性を排除することは原理的に不可能である。

しかしこれは、逆に言えば、解釈の有効性が否定される可能性が排除されないことを指摘するだけでは消去主義の主張に実質は与えられないということの意味する。解釈が放棄される可能性が排除されないというのとまったく同様の意味で、いかなる自然科学の実践も放棄される可能性がある。さらに、観察の理論負荷性をも認めるならば、およそわれわれが存在者として理解しているものはどれも消去の可能性を免れていないことになる。したがって、実践的観点をとる以上、消去主義が実質的な主張であるためには、解釈の有効性が否定される単なる可能性だけではなく、否定すべき実質的な根拠を示す必要がある。それゆえ、実践的消去主義の議論がその根拠を示していない限りは、命題的態度の実在性は十分に擁護可能であると言いうことができるのである。

- Baker, L. R. [1995] *Explaining Attitudes: A Practical Approach to the Mind*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Baron-Cohen, S., Leslie, A. and Frith, U. [1985] 'Does the Autistic Child Have a "Theory of Mind"?', *Cognition* 21.
- Brandom, R. [1979] 'Freedom and Constraint by Norms', *American Philosophical Quarterly* 16.
- Churchland, P. M. [1981] 'Eliminative Materialism and the Propositional Attitudes', *Journal of Philosophy* 78 (reprinted in Churchland [1989]).
- Churchland, P. M. [1988] 'Folk Psychology and the Explanation of Human Behavior', *Proceedings of the Aristotelian Society*, supplementary 62 (reprinted in Churchland [1989]).
- Churchland, P. M. [1989] *A Neurocomputational Perspective: The Nature of Mind and the Structure of Science*, Cambridge, MA.: MIT Press.
- Churchland, P. M. [1994] 'Folk Psychology (2)', in S. Guttenplan ed., *A Companion to the Philosophy of Mind*, Oxford: Basil Blackwell.
- Clark, A. [1989] *Microcognition*, Cambridge, MA.: MIT Press.
- Davidson, D. [1980] *Essays on Actions and Events*, Oxford: Oxford University Press.
- Davies, M. and Stone, T. (eds.) [1995] *Folk Psychology: The Theory of Mind Debate*, Oxford: Basil Blackwell.
- Dennett, D. C. [1981] 'Three Kinds of Intentional Psychology', in R. Healy ed., *Reduction, Time and Reality*, Cambridge: Cambridge University Press (reprinted in Dennett [1987]).
- Dennett, D. C. [1987] *The Intentional Stance*, Cambridge, MA.: MIT Press.
- Goldman, A. I. [1989] 'Interpretation Psychologized', *Mind and Language* 4 (reprinted in Davies and Stone (eds.) [1995]).
- Gordon, R. M. [1986] 'Folk Psychology as Simulation', *Mind and Language* 1 (reprinted in Davies and Stone (eds.) [1995]).
- Gordon, R. M. [1992] 'The Simulation Theory: Objections and Misconceptions', *Mind and Language* 7 (reprinted in Davies and Stone (eds.) [1995]).
- Graham, G. and Horgan, T. [1988] 'How to be Realistic about Folk Psychology', *Philosophical Psychology* 1.
- Horgan, T. and Graham, G. [1991] 'In Defense of Southern Fundamentalism', *Philosophical Studies* 62.
- 金谷武臣 [氏刊] 「解釈主義と不透明性」『葎報』三十三巻一頁。
- Lewis, D. [1972] 'Psychological and Theoretical Identifications', *Australasian Journal of Philosophy* 50 (reprinted in N. Block ed.,

- Readings in Philosophy of Psychology, vol. 1*, Cambridge, MA.: Harvard University Press, 1980).
- McDowell, J. [1994] *Mind and World: With a New Introduction*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- 信原幸弘 [一九九九] 『心の現と哲学』『勁草書房』。
- 高橋幸弘 [二〇〇〇] 『「我」の論・「我」なき論—心と知能の哲学—』『講談社現代新書』。
- Premack, D. and Woodruff, G. [1978] 'Does the Chimpanzee Have a Theory of Mind?', *Behavioral and Brain Sciences* 4.
- Quine, W. V. O. [1951] 'Two Dogmas of Empiricism', *Philosophical Review* 60 (reprinted in W. V. O. Quine, *From a Logical Point of View*, Cambridge, MA.: Harvard University Press, 1953).
- Ramsey, W., Stich, S. and Garon, J. [1991] 'Connectionism, Eliminativism, and the Future of Folk Psychology', in J. D. Greenwood ed., *The Future of Folk Psychology*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Sellars, W. [1956] 'Empiricism and the Philosophy of Mind', in H. Feigl and M. Scriven eds., *The Foundations of Science and the Concepts of Psychology and Psychoanalysis*, Minneapolis: University of Minnesota Press (reprinted in W. Sellars, *Empiricism and the Philosophy of Mind: With an Introduction by Richard Rorty and a Study Guide by Robert Brandom*, Cambridge, MA.: Harvard University Press, 1997).
- Stich, S. [1983] *From Folk Psychology to Cognitive Science*, Cambridge, MA.: MIT Press.
- Stich, S. and Nichols, S. [1992] 'Folk Psychology: Simulation or Tact Theory?', *Mind and Language* 7 (reprinted in Davies and Stone (eds.) [1995]).
- 鈴木貫之 [二〇〇一] 『心の理論の哲学と形而上学』『哲学史・哲学研究』第十六号『哲学史・哲学研究』二二号 所収。
- Wilkes, K. V. [1981] 'Functionalism, Psychology, and the Philosophy of Mind', *Philosophical Topics* 12.
- Wilkes, K. V. [1984] 'Pragmatics in Science and Theory in Common Sense', *Inquiry* 27.
- Wimmer, H. and Perner, J. [1983] 'Beliefs about Beliefs: Representation and Constraining Function of Wrong Beliefs in Young Children's Understanding of Deception', *Cognition* 13.